

2015年7月15日

スイス、ローザンヌ
IOC 東京オリンピック調整委員会
ジョン・コーツ委員長殿

コーツ様

私は2020年夏のオリンピックのために計画中的の新国立競技場について真剣に憂慮する市民団体である、Custodians of the National Stadiumを代表してお手紙を差し上げます。JSCが発表した現時点での建設費2520億円について日本国民は激怒しております。この金額は2008年の北京国立競技場の5倍、2012年のロンドンオリンピック・スタジアムの4.75倍であり、オリンピック史上最大であります。巨額の新競技場に関し、日本の主要新聞が実施した世論調査では90%以上の回答者がJSCの計画にノーと答えて国民の反対を裏付けています。新聞の社説、テレビ、ラジオの番組、SNS上の情報では、呆れるばかりにお粗末な資金計画と政府と東京都間の負担のなすり合いを厳しく批判しています。JSCが、2020年オリンピックにより小規模で、環境に配慮し、費用対効果のあるスタジアムを望む日本国民の声を無視しているのは明白です。

河野一郎 JSC 理事長と森喜朗日本ラグビー協会前理事長、現オリンピック組織委会長、がバカバカしいほど巨額で危険な新競技場に固執するのは彼らが2019年ラグビー・ワールド・カップを目標にしているからです。河野氏、森氏と最近オリンピック相に任命された遠藤利明氏は学生時代ラグビー選手で、彼らの夢はラグビー・ワールド・カップを東京で新しい競技場で開催することであり、オリンピック前年の期限が迫る状況のなか、批判を受け入れ、代替案を検討することを頑として拒否しています。彼らの内心の関心事はオリンピックではありません。

彼らは別の口実として、ハデイド案競技場デザインは2020年夏のオリンピックの主催都市選挙に提出した候補都市ファイル中の国際公約で、変更不可能と言っています。

私たちは貴職が最近東京を訪問された際の報道で、東京が2020年夏の大会の会場に関し、費用削減につとめた努力を賞賛されたと知り、うれしく思いました。貴職が新国立競技場は主に日本政府の責任であり、発言を遠慮されるお立場は理解しております。

それでも新競技場が2020年大会に間に合うよう完成されることはもちろん心配なさっているでしょう。まさにそれこそ、日本側準備関係者と日本市民に対し、貴職に明確にして頂きたい点です。2020年(2019年ではなく)が期限であるとコメントや記者会見で強調してください。貴職は同じく東京が候補都市ファイル中に掲げた「85%の会場が半径8キロ以内」の条件に関する変更について容認されています。新国立競技場のデザイン変更についてもIOCは同じように柔軟な態度であると表明してください。

JOCの竹田恒和会長は「IOCが進めている(費用削減の)改革から考えて、(新国立競技場の)現行案コストは得心のいくものではない」(インターナショナル・ビジネス紙2015年7月8日)と発言されています。

貴職の難しいお立場は承知の上で、IOCの立場を明らかにして下さいますよう、あえてお願いいたします。現行計画を修正する時間はまだあります。2020年大会に新競技場は出来上がります。ブリツカー賞受賞者の槇文彦氏をはじめ、日本の著名な建築家は実現可能な代替案をすでに用意してあります。どうかあまりにも巨大で莫大は費用がかかる競技場への批判が日本国内と海外の報道で高まっていることをご配慮くださいます。JSCの現行案に起因する諸問題を除去し、よりシンプルなデザインに変更するための私たちの努力にお力をお貸しください。

敬具

清水伸子
神宮外苑と国立競技場を未来に手わたす会、共同代表